

## 恐怖シャイと自己意識シャイサブタイプの差異<sup>1)</sup>

岸 本 陽 一

パーソナリティ特性としてのシャイネス<sup>2)</sup>(Shyness)は、社会的相互作用中、特に未知の人との相互作用中に、緊張、不安あるいはぎこちなさを感じる傾向と定義される(Cheek, Melchior, & Carpentieri, 1986)。シャイな人は、対人的な相互作用中に、緊張や特殊な生理的兆候、自己意識、他者から否定的に評価されることについての恐れ、行動のぎこちなさ、抑制、引きこもりなどを示すことが臨床的にも実験的にも認められている。これらの特徴は、(1)不快な情動的、生理的覚醒、(2)否定的な認知、(3)抑制された社会的行動、という3つの基本的な要素にまとめられる。生理的な水準では、シャイ(shy)な人は、心臓がどきどきする、発汗、脈拍の増加、赤面や胃の不快感などのような特殊な生理的愁訴を報告している。また、シャイな個人は、敏感な公的自己意識や他者に否定的に評価されるのではないかという恐れなどの認知的反応によって特徴づけられる。そして行動的側面として、他者を避ける、会話をためらう、アイコンタクトができないなどの普通に期待される社会的な応答の相対的欠如などの特徴が認められる。このように、シャイネスは、生理的、認知的、そして行動的レベルで現れる非言語的な要素を伴う複雑な反応パターンである(Fatis, 1983)。

シャイな人は、シャイでない人よりもこれら3側面においてより多くの兆候を示すことが報告されている(Fatis, 1983; Kishimoto & Masuda, 1990)。これら3側面はシャイネスの経験やシャイネスがどのように表出されるかを記述するのに有効であるが、シャイな人のすべてがこれら3側面すべての経験をするわけではない。高校生や大学生を対象にした研究に

よると、シャイな学生の40%から60%が生理的覚醒兆候を、60%から90%が認知的兆候を、また約65%がシャイネスの行動上の兆候を経験している (Cheek & Melchior, 1985; Fatis, 1983; Ishiyama, 1984)。

Buss (1980, 1986) は、恐怖シャイネス (fearful shyness) と自己意識シャイネス (self-conscious shyness) の間の区別を提唱している。Bussによると、恐怖シャイネスは人生の早い年齢の間に始まり、遺伝的に獲得された恐怖の要素を含んでいる (Buss & Plomin, 1975, 1984)。シャイになる傾向は、恐怖気質に基づくので、このような考えは可能であろう。Bussは、青年期と成人期におけるこのタイプのシャイネスは、恐怖気質と相関を示すし、行動抑制あるいは行動回避と否定的な評価に対する認知的な懸念を伴った強い身体的な覚醒状態によって特徴づけられる。これに対して、後年発達する、シャイネスの自己意識シャイタイプは、最初は認知的自己概念が既に発達し始めている4、5歳くらいで出現し、14歳から17歳の間でピークとなる (Cheek, Carpentieri, Smith, Rierdan, & Koff, 1986)。子どもたちは、他者が彼らを見ている、彼らの外見、態度そしてその他の社会的行動を注意深く見ていたり評価していることを認識したり教えられることによって彼らの公的自己意識 (public self-consciousness) を発達させる。自己意識シャイネスは恐怖性あるいは高い身体的覚醒を伴わないが、他者が社会的自己をどのように評価しているかに関する強い自己意識によって特徴づけられる、そして後には、否定的な評価に対する過度の認知的苦悩と社会的な行動の抑制によって特徴づけられる。彼はまた、恐怖シャイネスはシャイネスのより強い形であるとも示唆している。このようにBussのシャイネスのサブタイプに関する理論は、シャイネスの発達の側面とシャイネスを特徴づける3要素における差異の2つの側面を持っている。いくつかの研究は、このようなBussのシャイネスのサブタイプ理論を支持している (Cheek, Melchior, & Carpentieri, 1986; Bruch, Giordano, & Pearl, 1986; Kagan & Reznick, 1986)。

本研究の目的は、研究Ⅰでは Buss のシャイネスのサブタイプ理論をシャイネスの3要素—情動的側面、認知的側面と行動的側面—における反応から、研究Ⅱでは発達的な側面とサブタイプを特徴づけるパーソナリティ特性の両面から Buss のシャイネスのサブタイプ理論を、検討することである。

## 研究Ⅰ

### 方法

**実験参加者** 心理学関連科目を受講しているタルサ大学生260（男子88名、女子172名）名に対してシャイネス経験と強度に関する調査を実施した。このサンプルのうち135名（男子49名、女子86名）が自分自身を基本的にシャイであると自己報告した。本研究では、自分自身をシャイであると評定し、さらに、7段階（1.「全くシャイでない」から7.「極度にシャイ」）尺度で求められたシャイネスの強度で4.「かなりシャイである」よりも強くと評定した学生106名（男子41名、女子65名）からランダムに選ばれた男子26名、女子29名が実験に参加した。シャイネスの強度は、男女それぞれ、4.50 (SD = .59)、4.74 (SD = .78) であり、これらシャイネスの強度に関して男女差は認められなかった。

**手続き** 実験参加者には研究の概要が説明された後、普段経験しているポジティブ、ネガティブな感情とシャイネスについてさらに他者といるときに通常経験するシャイネス反応の評定を求めた。

その後、実験参加者は、異性と3分間の交互作用（ロールプレイ）を求められ、それがビデオに撮られることが教示された。課題は、後から実験室へ入ってくる未知の異性（サクラ）と3分間交互作用することであった。両者は、お互いに顔を知らないで初めてデートをしている、そしてレストランで注文の品が運ばれてくるのを待っているところを想像するよう求め

られた。ビデオカメラがセットされ、約1分の予定期間後、サクラが実験者に伴われて部屋に入って来た。実験者がお互いを紹介し、ロールプレイ課題が開始された。すべての実験参加者は異性のサクラと交互作用をした。サクラは、控えめであるが、実験参加者が会話を始めやすいように親しく反応するように訓練されていた。二人の男性と二人の女性のサクラは、中性的な状態を維持するよう、そして実験参加者に応答するが、話題をできるだけリードしないよう、また、会話が途絶えても20秒まで、あるいは実験参加者が沈黙を破るまではサクラが沈黙を破らないよう訓練されていた。交互作用に続いて、実験参加者は交互作用中の感情、認知、行動についての評定が求められた。

ロールプレイ終了後、シャイネスの状態測度に関して評定した後、実験参加者は交互作用の前から交互作用中にかけて録画されたビデオテープを見、それらの期間中にシャイネスを感じたりシャイネスを行動として表したりしている時にテープを止め、その時のテープカウンターとそこで生じていた生理的な不快さ、思考や懸念あるいは行動について記録し、その強度、それがどの程度重大な問題かを7段階尺度で評定することが求められた。最後に、シャイネス特性に関する質問紙が実施された。

**状態シャイネス尺度** PANAS (Positive and Negative Affect Schedule; Watson, Clark, & Tellegen, 1988) と SRS (Shyness Reactions Survey; Briggs & Metz, 1985) が通常の状態とロールプレイ中の実験参加者の感情とシャイネス反応の変化を測定するために用いられた。これらの2つの質問紙はロールプレイ前後に実施され、実験参加者はそれぞれ普段とロールプレイ中の感情を5段階(1.「全く違う」から5.「まったくその通り」)で、シャイネス反応も5段階(1.「全くない」から5.「ほとんど一貫してあった」)で評定することが求められた。SRSは28項目の認知的、感情的、行動的、そして身体的反応からなり、4つの因子：懸念(worry: Wo)、会話の受動性(conversational passivity: CP)、身体的愁訴(so-

matic complaint: SC)、そして注意散漫あるいは不注意 (distraction or inattention: D/I)、からなる。

**特性尺度** 質問紙の最後の冊子は、SISST (Social Interaction Self-statement Test; Glass, Merluzzi, Biever, & Larsdn, 1982)、CBSS (revised Cheek and Buss Shyness Scale; Cheek, 1983)、恐怖尺度 (EAS: fear from Emotionality, Activity and Sociability Temperament Survey; Buss & Plomin, 1984) の質問紙から構成されていた。30項目からなる SISST は、個人が対人交互作用の間に経験するいくつもの思考を並べたものであり、異性との交互作用中の実験参加者のポジティブ思考とネガティブ思考を評定するために用いられた。各項目は、1.「これまでそのような思考をほとんど持ったことがない」から5.「そのような思考を非常によく経験した」までの5段階尺度で評定される。14項目の CBSS (Cheek & Briggs, 1990, p.322) は、シャイネスの構造を測定するために用いられる。この尺度は広く実験研究で利用されており、懸念と行動抑制に関して有効な尺度であることは認められている (Arnold & Cheek, 1986; Cheek & Buss, 1981)。

## 結果と考察

### シャイネスの3側面における差異

シャイネスのサブタイプを検討するために、仮説に基づいて分類された2群の従属変数を比較した。本研究では、2つのシャイネスのサブタイプを EAS の恐怖得点と SCS の自己意識得点に基づいて分類した。男子の平均恐怖得点 ( $M = 10.4$ ) と女子の平均恐怖得点 ( $M = 13.6$ ) との間に有意に差が認められたが、実験参加者数が少ないので、グループの分類には男女を混みにした。恐怖シャイ群へは、恐怖得点が平均 ( $M = 12.2$ ) より高

く、同時に公的自己意識シャイが平均 (M = 20.7) より低い実験参加者が割り当てられた。他方、自己意識シャイ群は、恐怖得点が平均より低く、同時に公的自己意識シャイが平均より高い実験参加者が割り当てられた。恐怖シャイ群、自己意識シャイ群はそれぞれ、8名、12名からなる。

恐怖シャイと自己意識シャイのサブタイプ間で見いだされた差異は Table 1 に示されている。両群の従属変数に関する *t* 検定の結果は Buss の仮説を支持していた。「あなたのシャイネスはどの程度問題ですか」(1.「全問題でない」から7.「非常に問題である」までの7段階尺度) という質問に関して、恐怖シャイ群の実験参加者は自己意識シャイ群の実験参加者よりも有意に高かった。恐怖シャイ群は、自己意識シャイ群よりも、対人事態を避けるにより高い順位をつけていた。通常他者と一緒にいるとき、恐怖シャイ群は、自己意識シャイ群よりも、より多くの身体的な愁訴を経験していた。ロールプレイの期間、恐怖シャイ群は同様に、自己意識シャイ群よりも、より高い身体的不快を報告した。SISSTのネガティブな思考

Table 1 Means (SDs) and Differences between Fearful Shy and Self-Conscious Shy Group

Dependent variable	Fearful Shy (n = 8)	Self-Conscious Shy (n = 12)	<i>t</i> value
Questionnaire			
Problematic level of shyness	4.63 ( .92)	3.59 ( .90)	2.52*
Avoidance of social situation	2.63 ( 1.19)	3.59 ( .90)	2.16*
SRS (usual))			
Somatic Complaints	2.32 ( .67)	1.73 ( .48)	2.32*
Expanded PANAS (during role play)			
Confederates' rating of Partners' PA	33.63 ( 6.57)	26.82 (5.30)	2.52*
Confederates' rating of Partners' Shyness	12.00 ( 6.07)	16.92 (4.42)	2.10*
Confederates' PA	33.63 ( 7.75)	26.00 (6.80)	2.33*
SISST			
Negative Thought	42.00 (11.74)	33.92 (7.33)	1.91*
Video Tape Reconstruction (during role play)			2.86**
Problematic level of Physical Discomforts	4.45 ( 1.51)	1.94 (2.14)	

+ *p* < .075 \* *p* < .05 \*\* *p* < .01

に関しては、恐怖シャイ群と自己意識シャイ群の間に差が認められた。これらの結果は、Bussのシャイネスのサブタイプに関する仮説を支持している。

### サブタイプの発達の側面

Table 2は、最初にシャイを感じた時期の分布を示している。本研究では、分析に用いることができる実験参加者数が少なかったため、小学校入学より前に最初のシャイネスを経験した者を早発シャイネス (year of early developing shyness) と小学校入学以降に最初のシャイネスを経験した者を遅発シャイネス (year of late developing shyness) と分類した。恐怖シャイ群の3名(38%)は、最初にシャイを感じたのは6歳以前であると答えている。これは、Bussが早発シャイネスを分類したときの年齢の範囲に相当する。そして、5名(62%)は、それより後の時期であると答えている。これに対して、自己意識シャイ群ではわずか2名(17%)だけがシャイネスの開始年齢を早期の子どもに時期と答えているのに対して、10名(83%)は後の時期であると評定している。これらの結果は、Bussの仮説を支持する傾向を示しているが、統計的には有意ではなかった ( $\chi^2_{(1)} = 1.11, p < .30$ )。

Table 2 Frequency Distribution for Onset of Shyness

	Fearful shyness	Self-Conscious shyness
Year of late developing shyness	5	10
Year of early developin shyness	3	2
Total	8	12
$\chi^2_{(1)}=1.11$	n.s.	



## 研究 II

### 方 法

**実験参加者** 大学1、2年生で心理学関連の科目を受講している男女314名（男子181名、女子133名）。

**調査票** 7つのパーソナリティ特性を測定する項目、シャイネスの経験、シャイネスの3側面に関する質問などの81項目からなる調査票を実験参加者に集団実施した。本研究で測定された特性は孤独感（UCLA 孤独感尺度、工藤・西川、1983）、私的自己意識、公的自己意識（自己意識尺度、菅原、1984）、自尊心、シャイネス、社交性（Cheek & Buss, 1981）、恐怖心（Buss & Plomin, 1984）の7尺度である。

### 結果と考察

自分自身をシャイ（恥ずかしがり）であると自己報告したものは、70%（男子71%、女子69%）であり、アメリカの大学生の結果と比べるとはるかに高い値であるが、この結果は日本の大学生に関する従来の結果（岸本、1988）と一致している。

### シャイネスの発達の側面

すでに述べたように、自己意識は14、15歳を過ぎると有意に低下していくが、遺伝的な気質の影響はかなり安定していると考えられる。これから、児童期の後期あるいは成人期の初期に初めてシャイを経験した者よりも幼児期の最初にシャイネスを経験した者の方がシャイネスを持続させていると考えるのは理にかなっている（Cheek & Krasnoperova, 1999）。このような考え方に沿ってシャイネスの発達の側面とサブタイプとの関係を検討した。



Table 3 Frequency Distribution for Self-Report to the Time of First Shyness.

	Currently shy respondents	Previously shy respondents
Years of late-developing self-conscious shyness		
On entering college	6	0
On entering high school	12	5
On entering junior high school	23	5
During later elementary school years	15	4
On entering elementary school	51	14
Subtotal	107	29
Years of early-developing fearful shyness		
Before starting elementary school	60	13
As long as I can remember	54	15
Subtotal	114	28
Totals	221	57

$\chi^2_{(1)} = .110$  n.s.

シャイネスの強度に男女差が認められなかったので、男女込みで分析した。現在シャイであると応答した者 (currently shy) は221名、現在はシャイではないがかつてシャイな時期があったと応答した者 (previously shy) は57名であった。Table 3は、両群を最初にシャイネスを経験した時期 (発達の側面) で分類したものである。初期に発達するシャイネスはかなり持続しており、小学校入学前にシャイを初めて経験したと述べた者の内の114名 (80%) は今でもシャイであると報告しているが、小学校入学以降に最初のシャイネスを経験したと報告した者の107名 (79%) も現在でもシャイであると述べており、必ずしも差が認められなかった。シャイネスの遺伝的側面、自己意識の発達の側面から得られるシャイネスの発達の側面の仮説は確証されなかった。

### 早発シャイと遅発シャイ

Table 3の結果に基づき、現在シャイであると報告した実験参加者を早

発シャイ群と遅発シャイ群の2群に分け、両群を比較した。早発シャイ群と遅発シャイ群はそれぞれ、114名、107名である。7段階で評定したシャイネスの強度と他者と比較したときのシャイネス強度は初期発達シャイ群のほうが後期発達シャイ群よりも有意に強かった（それぞれ、 $t=2.36$ ,  $df=219$ ,  $p < .05$ ;  $t=2.74$ ,  $p < .01$ ）。恐怖得点も初期発達シャイネス群のほうが後期発達シャイネス群のほうが有意に高かった（ $t=2.41$ ,  $df=219$ ,  $p < .05$ ）。また、後期発達シャイネス群よりも初期発達シャイネス群のほうが、生理的反応をシャイネスの特徴としてよりよく当てはまると報告していた（ $t=2.26$ ,  $df=219$ ,  $p < .05$ ）。これらの結果は、初期発達シャイネスは強い恐怖を示し、シャイネス強度も強く、身体的な覚醒をより強く示しており、Bussの理論を支持している。

### 恐怖シャイと自己意識シャイ

Bussのシャイネスのサブタイプは発達の側面に基づいているが、研究Iと同様に、そのパーソナリティ特徴である恐怖と公的自己意識に関して分類し、両群を比較した。恐怖得点、公的自己意識得点ともに女性のほうが男性よりも有意に高かったので、恐怖得点がそれぞれ平均よりも高く、公的自己意識がそれぞれの平均よりも低い者を恐怖シャイ群、逆に公的自己意識がそれぞれの平均よりも高く、恐怖得点が低い者を自己意識シャイ群とした。両群の実験参加者はそれぞれ21名、49名であった。

シャイネスの頻度は自己意識シャイ群よりも恐怖シャイ群のほうが多く（ $t=1.99$ ,  $df=68$ ,  $p < .05$ ）、恐怖シャイ群のほうが自己意識シャイ群よりも他者にシャイネスが強いと評価されていると報告している（ $t=2.42$ ,  $df=68$ ,  $p < .05$ ）。恐怖シャイ群の方が自己意識シャイ群よりも生理的反応が自分のシャイネスにより当てはまると報告（ $t=2.80$ ,  $df=68$ ,  $p < .01$ ）しており、孤独感得点と自尊心得点は恐怖シャイ群よりも自己意識シャイ群の方が有意に高かった（ $t=2.14$ ,  $df=68$ ,  $p < .05$ ）。これらの知見は、恐怖

を特徴とするシャイな個人は、強いシャイネスを示し、生理的反応を特徴としており、Bussの仮説を支持していた。

## 総合的考察

Buss (1980, 1986) は、シャイネスを早い時期に発達する恐怖シャイネスと遅く発達する自己意識シャイネスに区別することを提唱している。シャイネスの恐怖タイプは典型的に人生の最初に発生し、警戒心や遺伝的要素を含む情動性の気質的な特質によって影響を受けている (Kagan & Reznick, 1986; Plomin & Rowe, 1979)。これらの気質的要因の影響は認知的自己概念の発達に先行しているので、Bussは特に早期に発達するシャイネスの潜在的な原因として低い自己評価を除いている。認知的自己が発達し始める4、5歳の頃に初めて現れる自己意識シャイネスのタイプは、自己評価の社会的過程がよりはっきりしてくる8歳頃にさらに強くなる、そして認知的自己中心性と自我同一性の問題を処理する14歳から17歳の間でピークとなる (Adams, Abraham, & Markstrom, 1987; Cheek, Carpentieri, Smith, Rierdan, & Koff, 1986)。このようにBussのシャイネスのサブタイプに関する理論は、シャイネスの発達の側面における差異とシャイネスを特徴づける3側面における差異の2つ側面を持っている。研究ⅠではBussのシャイネスのサブタイプ理論をシャイネスの3要素、情動的側面、認知的側面と行動的側面における反応から、研究Ⅱでは発達の側面とサブタイプを特徴づけるパーソナリティ特性の両面からBussのシャイネスのサブタイプ理論を検討した。

研究Ⅰの結果は、恐怖シャイ群は対人事態の回避をより高い順位におき、彼らのシャイネスの問題性の水準をより高く評定したことを示していた。対人事態の回避のような最も強い対人不安 (Pilkonis, 1977) は、恐怖シャイの個人にとってより重要で問題である。Bussが提唱しているよう

に、シャイネスの恐怖タイプは、行動抑制あるいは回避を伴った、SRSで測定された身体的な愁訴やロールプレイ中により問題だと報告した身体的不快感によって特徴づけられる。実験参加者と相互作用（ロールプレイ）をしたサクラのロールプレイ中の感情状態の評定は興味深い結果を示していた。これらの結果については、恐怖シャイは身体的な不快や否定的な考えのような内的な不快によってより悩まされるので、相互作用の相手（サクラ）は行動的な側面から相手（実験参加者）の感情状態を推測するので、恐怖シャイタイプの個人はロールプレイ中に自己意識シャイよりもポジティブな感情を持ち、あまりシャイではないと評定されるのであろう、と考えられる。

また研究Ⅱでは、シャイネスの恐怖タイプは自己意識タイプと比べて、多く、強いシャイネスを経験し、生理的要素をシャイネスの特徴として認めていた。他方、シャイネスの自己意識タイプは強い孤独感と高い自尊感情を持っていた。これら研究Ⅰ、研究Ⅱで得られたサブタイプの特徴を検討した結果はいずれも Buss のシャイネスのサブタイプ理論を支持している。

他方、研究Ⅰ、研究Ⅱの両方でシャイネスのサブタイプに仮定されている発達の側面に関する検討では、緩やかな傾向は認められたが、理論から導かれるような結果は認められなかった。本研究では研究の方法として、恐怖得点と自己意識得点それぞれの平均値に基づいて平均より上か下かという基準で2つのタイプを分類した。大きなサンプルから、それぞれの平均得点から大きく離れ、それぞれの特徴をはっきりと示す2群を選び出して (e.g., Bruch, Giordano, & Pearl, 1986)、それぞれの発達の側面を検討する必要がある。本研究では Buss のサブタイプ理論における恐怖シャイネスと自己意識シャイネスの特徴に関しては支持されたので、彼の分類は、シャイな個人の間にあるシャイネスの3要素における差を説明するのに有効の方法であると考えられる。シャイな個人は生理的、感情的、認知

的そして行動的な兆候がミックスされたものを示すが、彼らが兆候を表出あるいは強調する程度には差がある。従って臨床的には、サブタイプに応じた適切な治療の選択が必要となるだろう (Pilkonis, 1977, 1986; Bruch, et. al., 1986; Henderson & Zimbardo, 2001)。

#### 引用文献

- Arnold, A. P., & Cheek, J. M. 1986 Shyness, self-preoccupation, and the Stroop Color and Word Test. *Personality and Individual Differences*, 7, 571-573.
- Briggs, S. R., & Metz, D. M. 1985 The factor structure of shyness reactions. *Paper presented at the meeting of the American Psychological Association*, Toronto, Canada.
- Bruch, M. A., Giordano, S., & Peal L. 1986 Differences between fearful and self-conscious shy subtypes in background and current adjustment. *Journal of Research in Personality*, 20, 172-186.
- Bruch, M. A., Gorsky, J. M., Collins, T. M., & Berger, P. A. 1989 Shyness and sociability examined: A multicomponent analysis. *Journal of Personality and Social Psychology*, 57, 904-915.
- Buss, A. H. 1980 *Self-consciousness and social anxiety*. San Francisco: Freeman.
- Buss, A. H. 1986 A theory of shyness. In W. H. Jones, J. M. Cheek, & S. R. Briggs (Eds.), *Shyness: Perspectives on research and treatment* (pp. 39-46). New York: Plenum.
- Buss, A. H., & Plomin, R. 1974 *A temperament theory of Personality development*. New York: Wiley.
- Buss, A. H. & Plomin, R. 1984 *Temperament: Early developing personality trait*. Hillsdale, NJ: Erlbaum.
- Cheek, J. M. 1983 The revised Cheek and Buss Shyness Scale. *Unpublished manuscript*, Wellesley College.
- Cheek, J. M., & Briggs, S. R. 1990 Shyness as a personality trait. In W. J. Crozier (Ed.), *Shyness and embarrassment: Perspectives from social psychology* (pp. 315-337). New York: Cambridge University Press.
- Cheek, J. M., & Buss, A. H. 1981 Shyness and sociability. *Journal of personality and Social Psychology*, 41, 330-339.
- Cheek, J. A., Carpentieri, A. M., Smith, T. G., Rierdan, J., & Koff, E. 1986 Adolescent shyness. In W. H. Jones, J. A. Cheek, S. R. Briggs (Eds.), *Shyness: Perspectives on research and treatment* (pp. 105-115). New York: Plenum.
- Cheek, J. M. & Krasnoperova, E. N. 1999 Varieties of Shyness in Adolescence and Adulthood. In L. A. Schmidt and J. Schulkin (Eds.), *Extreme fear, Shyness, and Social Phobia: Origins, Biological Mechanisms, and Clinical Outcomes*. (pp. 224-250). Oxford University Press: Oxford.

- Cheek, J. M., & Melchior, L. A. 1985 Measuring the three components of shyness. In M. H. Davis & S. L. Franzio (Co-chairs). *Emotion, personality and well-being II*. Symposium conducted at the 93rd annual meeting of the American Psychological Association, Los Angeles.
- Cheek, J. M., Melchior, L. A., & Carpentieri, A. M. 1986 Shyness and self-concept. In L. M. Hartman & Blankstein (Eds.), *Perception of self in emotional disorder and psychotherapy* (pp.113-131). New York: Plenum.
- Fatis, M. 1983 Degree of shyness and self-reported physiological, behavioral, and cognitive reactions. *Psychological Reports*, **52**, 351-354.
- Glass, G. R., Merluzzi, T. V., Biever, J. L., and Larsen, K. H. 1982 Cognitive assessment of social anxiety: Development and validation of a self-statement questionnaire. *Cognitive Therapy and Research*, **6**, 37-55.
- Henderson, L. & Zimbardo, P. G. 2001 Shyness as a clinical condition: The Stanford model. In W. R. Crozier & L. E. Alden (Eds.), *International Handbook of Social Anxiety: Concepts, Research and Interventions Relating to the Self and Shyness* (pp.431-47). Chichester: Wiley..
- Ishiyama, F. I. 1984 Shyness: Anxious social sensitivity and self-isolating tendency. *Adolescence*, **19**, 903-911.
- Kagan, J., & Renznick, S. J. 1986 Shyness and temperament. In W. H. Jones, J. M. Cheek, & S. R. Briggs (Eds.), *Shyness: Perspectives on research and treatment* (pp. 81-90). New York: Plenum.
- 岸本陽一 1988 シャイネス (Shyness) に関する予備調査, 日本心理学会第52会大会、日本心理学会第52会大会発表論文集、p. 803. 広島.
- 岸本陽一 1994 シャイネスの経験: 生理・認知・行動的側面、磯博行・杉岡幸三 (編) 情動・学習・脳、151-161、二瓶社: 大阪.
- Kishimoto, Y., & Masuda, K. 1990 Relationships between degree of shyness and self-reported physiological, cognitive, and behavioral reactions. *Paper presented at the 22nd International Congress of Applied Psychology*, Kyoto, Japan.
- 工藤 力・西川正之 1983 孤独感尺度に関する研究 (1): 孤独感尺度の信頼性・妥当性の検討、実験社会学研究、**22**、99-108.
- 成田健一 1990 羞恥感情を引き起こす状況の構造-多変量解析を用いて-、人文論究 (関西学院大学)、**40**, 1, 73-92.
- Pilkonis, P. A. 1977 Shyness, public and private, and its relationships to other measures of social behavior. *Journal of Personality*, **45**, 585-595.
- Plomin, R. & Rowe, D. C. 1979 Genetic and environmental etiology of social behavior in infancy. *Developmental Psychology*, **15**, 62-72.
- 桜井茂男・桜井登世子 1991 大学生用シャイネス (shyness) 尺度の日本語版の作成と妥当性の検討、奈良教育大学紀要、**40**, 1, 235-243.
- 菅原健介 1984 自意識尺度 (self-consciousness scale) 日本語版作成の試み、心理学研究、**57**、184-188.
- 菅原健介 1992 対人不安の類型に関する研究、社会心理学研究、**7**、1、19-28.

Watson, D., Clark, L. A., & Tellegen, A. 1988 Development and validation of brief measure of positive and negative affect: PANAS scale. *Journal of Personality and Social Psychology*, 54, 1063-1070.

注

- 1) 本研究の一部は、第27回国際応用心理学会(2000)、日本社会心理学会(2001)で発表した。
- 2) 本研究では、シャイ、あるいはシャイネスとカタカナ表記を用いる。シャイネスに相当する日本語として、内気、引っ込み思案、あるいは恥ずかしがり、恥ずかしさ等の用語が当てられる(桜井・桜井、1991、成田、1990、菅原、1992)が、本研究で、学生に質問するときには、シャイあるいはシャイネスに相当する日本語としては、岸本(1994)に従い、恥ずかしがり(や)という用語を用いた。